ヴァージニア会社と公式文書
(その二)

高 橋 正 平

一私業から始まりジェームズ一世による特許を得て国家的事業としてアメリカ・ヴァージニア植民に本格的に乗り出したヴァージニア会社は当初から様々な問題に直面し，ヴァージニア植民を放棄する決意直前まで事業は暗礁に乗り上げかけていた。ヴァージニア会社は，公式の文書を公表し，植民の実体を隠蔽する「楽園」ヴァージニアを人々の胸に植え付けようとした。ヴァージニア植民の目的はキリスト教「福音」の普及であり，異教徒の改宗にある。ヴァージニア会社は植民の目的・使命に異教徒の改宗を掲げ，植民行為を正当化しようとした。しかし，公式文書から既に明らかにしたように，ヴァージニア会社のそもそもの目的は植民から期待される「利益」であった。ヴァージニア会社へ出資した人達の最大の関心は「利益」にあった。本論では，ヴァージニア現地からの報告書，旅行記，書簡からヴァージニア植民の実体を解明しようとするものである。論を進めるにあたり，Arthur Barlowe: *The first voyage made to the coastes of America....* (1584), Thomas Hariot: *A True Report of the New Found Land in Virginia* (1588), Ralf Lane: *An account of particularities of the imployments of the English menn left in Virgina....* (1586), George Percy: *Observations* (1607), Edward Maria Wingfield: *Discourse* (1608?), John Smith: *A True Relation of Such Occurrences and Accidents of Noate as Hath Hapned in Virginia* (1608), Richard Hakluyt: *A particular discourse concerninge the greate necessotie and manifolde comody growe to this Realme of England by the Westerne discoveries lately attempted* (1584), *The Principall Navigations, Voiages, Traffiques and Discoveries of the English Nation...* (1589; 1598-1600), William Strachey: *The Historie of Travell into Virginia Britania* (1612), Samuel Purchas: *Hakluytus Posthumus* (*or Purchas His Pilgrimes*) (1625)，等から彼らがいかなる目的をもってヴァージニアへ行ったか，何をヴァージニアで実際に行ったのかを調べ，更に他の現地の書簡，ヴァージニア会社に関するパンフレット等からヴァージニア植民の実体，現状を明らかにしたい。

(1)

1606年ヴァージニア会社がジェームズ一世の特許状を得て，本格的にイギリスの国家的事業としてヴァージニア植民に着手する以前からイギリスは世界各地へその植民地を広げ

ようとしており，ヴァージニア植民はそれらイギリスの植民地確保事業の一環であった。ジェームズ一世の特許状を得る前にもイギリスはヴァージニアへの数々の植民を試み，その報告書から我々は植民の実体をつぶさに見ることができる。そもそもイギリスがスペインが制覇していたフロリダの北のヴァージニアに植民地を建設しようとした意図はどこにあったのか。この問題はまたなぜイギリスが北米の植民地建設にあれほどまでの熱意を示したのか，にも通ずる大きな問題である。島国イギリスが海外植民地を建設しようとした背景には何があったのか。植民活動は単なる個人の冒険心からではなくイギリスの政治，社会，経済問題が密接にからみあったなかから生じてきたものであると言わねばならない。ヴァージニア植民以前にイギリスの植民活動についてその理論的な基盤となった書にハクルート（Richard Hakluyt）が1584年に書いた『西方植民論』（このフルタイトルは上記の通りであるが通常 *Discourse of Westerne Planting* と記される[11]）がある。この書はイギリスの海外進出の理論的支柱となった書で，イギリスの海外進出問題にとっては欠くことのできない書であるが，そこでハクルートは彼以後のイギリス植民者の行動の指針となるべく植民政策の正当化を強く時の女王エリザベスに訴え，イギリスの海外進出の必要性・重要性を説いている。ハクルートによればイギリスの海外進出・植民のそもそもの理由はイギリスの社会及び経済にある。大国スペインの西インド諸島制覇に対抗しての北アメリカにおける活動の拠点としての西方植民を力説しながらも，その第１章では西方植民の第一の理由を「キリスト教の信仰」の「宣べ伝え，教え広めてゆく責任」と考え，それが「なにを置いても，まず真っ先にやられるべき主要な仕事」とし，キリスト教布教のために植民地を作ることが急務だと言っている。ハクルートによれば，キリスト教布教が第一で，植民地建設はキリスト教布教にとっては副次的性格を有するものなのである。しかしこのキリスト教布教は誰の眼から見ても異論の出る余地のない大義名分を借りた植民地建設擁護の口実で，その裏には当時のイギリスが直面した社会及び経済の諸問題があり，それに身動きができなくなっていたイギリスが何とかして自らの打開策を求めようとしていた事実があったのである。その証拠にハクルートは第20章で西方植民の真の理由をエリザベス女王に訴え，イギリス毛織物の販売，西インド諸島におけるスペイン制覇の阻止，国内失業者の雇用確保等が植民事業から確保できることを強調しているのである。なぜイギリスが海外に進出しなければならないのか，なぜ植民を行わねばならないのかは単にキリスト教の布教という宗教的次元にとどまる問題ではない。イギリスは西方における植民成功を契機としたヨーロッパ諸国からの経済的自立を望み，結果として西方植民がスペイン，ポルトガル，オランダと肩を並べうる超大国への脱却を目指したイギリスの存亡をも賭けた国家的事業であったことが理解出来るのである。イギリス植民の歴史はハクルートやパーチャス（Purchas）によって詳細に論じられているが，それらはイギリスの閉塞した経済の活路を植民によって解決しようとする試みであることを示している。その植民の一端が

ヴァージニア植民であったわけであるが，ここにも今見たハクルートの植民擁護の論理がそのまま反映されている。「帝国主義者ハクルート」[2]にとってイギリスの植民活動は経済的な国家の病弊をいやしてくれる格好の手段であった。ハクルートの『西方植民論』は彼以後のイギリス植民に大きな影響を及ぼしたが，彼はまたイギリス国家の将来を海外植民と海外交易に位置づけたイギリス植民史上記念碑的大作である『イギリス国民の主要な航行，航海，交易及び発見』を1589年に書いたが，その序文でも彼はスペインを意識し，イギリスの国威発揚を鼓舞し，次のように述べる。

[it is high time for us] with all speede to direct our course for the milde, lightsome, temperate, and warme Atlantick Ocean, over which the Spaniards and Portugales have made so many pleasant prosperous and golden voyages....this dare I affirme; first that a great number of them have satisfied their fame-thirsty and gold-thirsty mindes with that reputation and wealth,...[3]

スペインやポルトガルの中南米での植民成功にならい，イギリスも西方植民に乗りだし，スペインやポルトガルのような列強に肩を並べることのできる機会を得ることが出来る。彼はさらに言葉を続けて「イギリスも... アメリカその他の未発見地をスペイン人やポルトガル人と分かち合うことが可能なのだ」ともいう。ヴァージニアは “the great & ample country” であり，その内陸は “so sweete and holesome a climate, so rich and abundant in silver mines, so apt and capable of all commodities, which Italy, Spaine, and France can afforde,...” [4]である。温暖な気候，豊富な銀に恵まれ，イギリスがスペイン，イタリアに依存している産物の調達ができる土地，それがヴァージニアである。ハクルートは，国際舞台でのイギリス地位向上をヴァージニア植民に賭け，ヴァージニア植民によるイギリス経済の自立をも植民から求めている。ウィリアムズによれば，ハクルートの登場によって彼以前の黄金探求としてのイギリスの植民政策に一種の帝国主義が台頭し，宝探しが農業に，重金主義が重商主義にとって代わられた。[5]ハクルートは『西方植民論』と『イギリス国民の主要な航行，航海，交易及び発見』において以後のイギリス植民の論理的基盤を形成し，彼以後の植民関係者は大なり小なりハクルートの植民論の反復であると言っても過言ではないだろう。ハクルートはイギリス国家の命運は海外にあることを十分に認識し，他国とりわけスペインの世界の舞台における急激な台頭に注目していた。スペインは島国イギリスにとって格好のモデルとなりうる。スペインができないことがどうしてイギリスにできないことがあろうか。このようなイギリス国民の思いを代弁し，イギリス国民を西方植民へと駆り立てたのがハクルートであった。その意味でハクルートはイギリス植民の理論的擁護者であったと言えよう。

ハクルートの書が西方植民擁護の理論書であるとすればバーロー（Arthur Barlowe）の『アメリカ海岸への最初の航海』（*The first voyage made to the coastes of America*）（1584年）はその実践版であると言える。バーローはヴァージニア探検の詳細をウォールター・ローリに報告しているが，そこで彼が語っているのはキリスト教の普及ではなく，まさしくヴァージニアの地勢調査，インディアンとの交渉である。我々はバーローの報告書にキリスト教布教に励むバーローの姿を見ることはできない。バーローにとってヴァージニアはイギリスに「収益をもたらす」土地である。(6)ヴァージニアにおける豊富な動植物，インディアンとの交易がヴァージニア探検の主目的であり，インディアンをキリスト教に改宗させたとの報告はない。ヴァージニアの豊かな土地に言及してバーローは次のように言う。

ここの土壌は世界でいちばん豊穣で，芳香を放ち，肥沃で健康にもよいようです。香りがよく用材となる樹木が14種類以上もあり，その下生えとなっているのは，大概は月桂樹のような木です。イギリスのオークに類した木も土地にありますが，それよりずっと大きく，材質もはるかに上です。(7)

バーローの報告では豊かな土地以外に顕著なのは現地人に対する好意的な見方である。人々は「この上もなくやさしく，愛情に満ち，忠実で，いっさいの術策や裏切りと無縁，黄金時代さながらの生き方」を送っている。彼らより「もっと親切で，もっと愛情豊かな人たちは，世界中どこを捜してもいるはずがない。」(8)バーローの報告は概して楽観的であると言える。その真意はどこにあったのか。以後のイギリス人の植民に希望を与えようとしたためかあるいはエリザベス女王の機嫌をとり，海外植民事業への援助を女王から期待するためであったのかは推測の域を越えないが，ともかくバーローのヴァージニア報告はイギリス人のヴァージニア植民への期待と希望を十分に意識した報告書であると言える。

初代ヴァージニア総督のレイフ・レーン（Ralf Lane）は1585年８月17日から1586年６月18日までロアノーク島を探検しており，彼の報告書はハリオットの報告書と共に以後の植民の“main sources”になったと言われてるいるが，(9)レーンがロアノーク島で行ったことはまさしくロアノーク島の探検調査であり，原住民との友好，敵対関係を通して原住民の性状を記録することであった。レーンは，ロアノーク島探検の主なる目的を「鉱山の発見」と「南海（太平洋）の発見」とし，「そのいずれかが実現しないことには，我々が探検したこの地域にわが同胞が居住するようにはならないからです。上述の二つの中のいずれかでも発見しえたら，この地域は，この世でおよそ人間の居住するもっとも快適な，もっとも健康な，かてて加えてもっとも豊饒な地となるでしょう。」と言いきっている。(10)レーンのロアノーク島探検の目的は鉱山と太平洋への航路発見にあり，原住民のキリスト教

への改宗については何も触れられてはいない。ハクルートが強調した「福音」の普及は全く記述されず，その報告書はもっぱらロアノークが英国の植民地としてふさわしい地であるかの実地調査であり，それはまた現地人との接触を通して現地人が「侵入者」に対していかなる態度をとっているのかをもあわせて報告することに終始している。1606年に本格的に始まることになるヴァージニア植民以前の現地からの報告書には共通点がある。それは現地の調査・探検とインディアンとの交流である。ヴァージニアに行った人達は現地の地勢をつぶさに調査し，時には地図を作成し，また行き先々で出会うインディアンとの交渉を通してイギリス人に対して友好的な部族と敵対する部族を分類し，その居住地をも地図に記入することを探検・調査の第一の目的としていたことがわかる。ヴァージニアへの探検家達の報告書はおおよそこのような特徴をもっていたが，1606年以降のヴァージニア会社から派遣された者たちの報告書についても同様なことが言える。

1606年12月の第一次ヴァージニア植民隊としてヴァージニアへ向かい，1609年から1610年までヴァージニア植民総督を勤めたGeorge Percyの『観察』（*Observations gathered out of a Discourse of the Plantation of the Southerne Colonie in Virginia by the English, 1606*）は最初のヴァージニア植民の現状を詳細に報告しているが，そこに我々が見るのはキリスト教布教に励むパーシィーの姿ではない。それは西インド諸島からヴァージニアまでの航海と現地の調査，インディアンとの交流を通しての彼らの生活習慣の記録である。豊饒の地としてのヴァージニアが“...the Country being so fruitfull, it would be as great a profit to the Realme of England”として描かれ，[11]ヴァージニアがいかに大きな利益をイギリスにもたらすかが述べられている。1607年５月ヴァージニア評議会委員長に選任されたEdward Maria Wingfieldはカトリック教徒である故に委員長を解任されたが彼は*Discourse*を1608年に書き表す。そこでWingfieldは，Newport船長のイギリス帰国以後のヴァージニアでの出来事を詳細に記すると同時に自らの評議会委員長解任の理由には何ら正当性がないことを述べ，身の潔白を主張する。ヴァージニアでの内紛が語られ，植民の目的や成果については何ら触れられていない。ヴァージニアでの評議会委員長解任劇釈明にすべてがあてられており，評議会委員長経験者から植民についての個人的な見解は聞かれない。[12]1610年ヴァージニア植民の“governour”，“captain-general”に任命されたDelaware卿は，ヴァージニア評議会に書簡を送っているが，肥沃な土地，豊富な物資・植物といったヴァージニアへお決まりの賛辞を送り，ヴァージニア植民は「極めて価値のある事業」で「神の栄光」「国家の名声」「植民推進者のなぐさめ」のためになると言い，[13]さらに，植民は「多くの価値ある産物の収益」をもたらし，国家は「名誉」を，個人は「利益」を獲得できる「名誉ある事業」であると言う。[14]デラウエアはヴァージニア植民を宗教的及び商業的な観点からとらえているが，1606年に国家的事業としてヴァージニア植民が始まり，その後現地からはかんばしくない報告が本国に届くなかでデラウエアーは必

死に植民の意義を再度訴えるのである。

（2）

ヴァージニア植民は言うに及ばず17世期イギリスの海外植民地開発に精力的に取り組んだ人物にジョン・スミス（John Smith）がいる。スミスは1606年ヴァージニア会社からヴァージニアへ派遣され，植民地建設に加わり，その間インディアンの捕虜となり，処刑直前に酋長の娘ポカホンタスの嘆願によって処刑を免れたり，Jamestownの評議会から死刑の判決を受けたり，更にはヴァージニア植民評議会の議長にまでなった波乱に富んだ生涯を送った半ば伝説的な人物である。ジョン・スミスはヴァージニアに関して主として次の三冊を世に送っている。『ヴァージニア入植についての真実の話』（*A Trve Relation of such occurrences and accidents noats as hath hapned in Virginia since trhe first planting of that colony,...*（1608）（以下『真実の話』と略記），『ヴァージニアの地図』（*A Map of Virginia,* 1612）及び『ヴァージニア，ニューイングランド，サマー諸島通史，1584年から現在の1624年にいたる冒険商人，植民者，総督の氏名を付す』（*The Generall History of Virginia, New-England, and the Summer Ilses with the names of the Adventurers, Planters, and Governours from their first beginning An:1584 to this present 1624*））（以下『通史』と略記）である。いずれもヴァージニア評議会議長にもなったスミスの手になるだけにその信憑性は信じるに値する報告書であると言えるが，自己顕示欲の強いスミスの極端に個人的な個所は削除されたと報告書もあるという。スミスは1608年６月２日フェニックス号がヴァージニアを離れるまでを『真実の話』で扱っているが，スミスはこれまでと同様ヴァージニアの探検・調査を語るが，それは従来のヴァージニア報告と同様である。ヴァージニアは肥沃な土地を有し，豊富な動植物に恵まれている。スミスにとってヴァージニアは，「極めてすぐれた快適な地であり，気候は温暖にして健康的，土地は肥沃，期待しうる産物は（その栽培と育成が適切なら）豊富」で，「さして苦労もせず利益をあげることができる。」[15] しかし，植民の宗教的使命に言及することも忘れない。ヴァージニア植民は「神の栄光を称えるためであり，邪教の徒の間に神の真実の教えを打ち立て，迷信と偶像崇拝とを打ち壊し，何千という迷える羊ー彼らは今に至るまで異教と偶像崇拝と迷信という無明の道を踏み迷ってきたのだがーをキリストの囲いの中に導き入れること」[16]を目的ともするのである。しかしながら，植民の宗教的使命については報告書ではその実践は見られない。そのほとんどはヴァージニアの土地の調査，特にジェームズ川の上流の探検及びインディアン部族との接触，食物交渉であり，また，探検隊内部の内紛でもあり，肝心のキリスト教伝道は全く行われていない。『真実の話』は，ジェームズ川周辺の探検書としてはそれまでの報告書には見られない詳細な記録であるが，ヴァージニア植民の異教徒改宗という理想的な目的は文言だけは力強く響くがその響きは実際にはインディアンには届いていな

い。報告書の最後で「船荷としてスギ材を積み込めば本国の出資者たちに喜んでもらえる」と言い，「交易や通商の上でも大いに利益をもたらすこの地域」の恩恵にイギリスは必ずや与るとスミスは断言する。[17]スミスにとってヴァージニア植民はヴァージニア会社出資者にとっての個人的な利益と国家の利益を同時に確約してくれる植民であり，キリスト教伝道は実行を伴わない言葉だけのものとなっている。スミスの『ヴァージニアの地図』(*A Map of Virginia,* 1612) はスミスがポウハタンによって捕虜にされ，処刑直前にポウハタンの娘ポカホンタスによって救助されたというその真偽のほどは定かではない有名なエピソードに触れているが，そこでもスミスの関心事はヴァージニアの探検・調査であり，彼はそれをもとに詳細な地図を作製しているほどである。『ヴァージニアの地図』でスミスはヴァージニアに触れて次のように言う。

The mildnesse of the aire, the fertilitie of the soile, and the situation of the rivers are so propitious to the nature & vse of man as no place is more convenient for pleasure, profit, and mans sustenace.[18]

温暖な空気，肥沃な土壌，川の状況は他の土地には見られない「喜び，利益と植民者の生計」に好都合である。これは『真実の話』でスミスが言及していることで，報告書が必ず言及しなければならない内容のひとつであるが，スミスはヴァージニア植民が国家にいかに利益をもたらすかを国家の経済的自立の観点から強調する。イギリスは，モスクワ，ポロニア（ポーランド），スイス，フランス，スペイン，イタリア，オランダが産出する資源をすべてヴァージニアで調達できるとスミスは言う。

Then how much hath Virginia the prerogatiue of all those florishing kingdomes for the benefit of our land, whenas within one hundred miles all those are to be had, either ready provided by nature, or else to bee prepared, were there but industrious men to labour.[19]

イギリスのヴァージニア植民の真の目的がこの一節に読みとることができる。イギリスの西方植民の第一の目的はハクルートが『西方植民論』ですでに明らかにしていたように，イギリス経済のヨーロッパ諸国への依存からの脱却であった。イギリス経済の自立を植民に託していたイギリスの悲願が西方植民地開発にあり，スミスもその点については十分承知していたはずである。しかしながらスミスは植民の目的をヴァージニアの経済的開発とはしない。ヴァージニアは兵士の育成，水夫の訓練，商人には交易，善人には利益をもたらす場であるが，しかし何よりも重要なのはヴァージニア植民は「あわれな異教徒を神の

真の知識と聖なる福音」へと導く事業なのである。[20]ここでもスミスはヴァージニア植民の宗教的使命を忘れることはない。スミスはの集大成ともいうべく『ヴァージニア，ニューイングランド，サマー諸島通史，1584年から現在の1624年にいたる冒険商人，植民者，総督の氏名を付す』（*The Generall History of Virginia, New-England, and the Summer Ilses with the names of the Adventurers, Planters, and Governours from their first beginning An:1584 to this present 1624*）（以下『通史』と略記）ではどうか。6巻から成る『通史』はハクルート，パーチャスの流れを汲むイギリスのヴァージニア，バーミューダ及びニュー・イングランドでの植民活動の記録である。スミスの本書執筆の意図はイギリス人の植民への関心を喚起し，彼らの眼を投資に向けさせ，誠実な効率的な政府，適切な計画，勤勉な入植者及び国家からの積極的な援助が植民には不可欠であるかを読者に訴えることである。ヴァージニア植民は3巻と4巻で扱われているが，『真実の話』や『ヴァージニアの地図』と重複している箇所が多い。『通史』におけるヴァージニア植民に関するスミスの記録はその表題にもあるように1584年から1624年までのイギリス人のヴァージニアでの探検・植民活動記録である。彼が本書を執筆する2年前ヴァージニアにおけるイギリス人とインディアンとの友好関係を根底から断ち切ったインディアンによる大虐殺事件が生じ，イギリスのインディアンへの態度は一気に硬化する。インディアンによる大虐殺はイギリス側からすればヴァージニア植民の徹底化のまたとない絶好の口実到来という訳である。それ以後イギリスのヴァージニア植民地化は急速に進む。そのような背景の中で書かれた『通史』はそれゆえヴァージニア会社へのこれまでのてぬるい植民活動への批判が見られる。スミスは歴代のヴァージニア総督の植民活動を客観的に描いている印象を与えるが，所々にスミスの本音が聞かれ，ヴァージニア植民がいかに人々の期待に裏切ってきたかが容易に理解できる。自己顕示欲の強く，自己をやや英雄化する傾向のあるスミスからすれば色あせた感のするヴァージニア植民を国民の期待通りに実行できるのは自分しかいないということを本書で示したかったのである。彼がいかに多くの困難を排し，ヴァージニアを探検・調査したかがインディアン特にパウハタン王との交流から生々しく描かれる。インディアンとの交渉，裏切り，探検隊内部の内紛・反目を通して，スミスはヴァージニアがいかなる土地であるかを描く。前作同様ヴァージニアの肥沃な土壌，豊かな動植物にふれ，[21]ヴァージニアがいかに植民に適しているかを強調する。これらの報告はこれまですでに彼が記録していたことで新しい記述はない。ただ彼がヴァージニアの出納係と評議会にあてた書簡にはスミスのヴァージニア植民についての率直な態度が表れており，彼のヴァージニア会社への要求や不満やらが吐露されている。会社からの金銭的な援助の不足，大工，農夫等の必要性を訴え，非協力的な植民者のなかでは十分な植民活動が出来ないことに彼は強い不満をもらす。[22]植民の目的である異教徒の改宗には触れられていない。彼らの関心は“present profit”にあり，“profitable returns”にあった。[23]ヴァージニア植民の現状に

は決して満足はできないが，スミスは決して植民の将来に悲観することはない。ヴァージニア植民はわずかな人的金銭的援助から始まったが，これまでの植民活動はそれなりの成果をあげていると言う。

notwithstanding all their factions, mutinies, and miseries, so gently corrected, and well prevented: peruse the Spanish Decades: the Relation of Master Hakluit, and tell me how many ever with such small meanes as a Barge of 22 tuns, sometimes with seven, eight, or, nine or but at most, twelve or sixteene men, did ever discover so many fayre and navigable Rivers, subject so many severall Kings, people, and Nation, to obedience, and contribution, with so little bloudshed.(24)

ヴァージニア会社からの不十分な援助がありながらも植民は徐々に拡大しているとスミスは言う。スミスがヴァージニアに期待していたのは公式文書が雄弁にうたっていた異教徒の改宗ではない。スミスはその発見に疑問が生じていたにもかかわらず，金と銀の発見は可能だと信じて疑わない。(25)スミスにとってヴァージニアはなにはともあれ英国の経済的自立を可能に至らせる「黄金の土地」であり，“the fittest place for an earthly Paradise”(26)であった。にもかかわらずスミスは異教徒への福音伝道を強調することを決して忘れはしない。スミスは序論で『通史』執筆の目的を4点あげているが，その第一点はジェームズ一世の植民による領土拡大の正当化と異教徒の改宗である。

...the reducing Heathen People to ciuilitie and true Religion, bringeth honour to the King of Heathen.(27)

これに加え，スミスは紳士にヴァージニア植民の資金的援助を訴え，その見返りはかならずや期待できると言う。

Let your [Gentlemen's]bountie supply the necessities of weake biginnings,...; the returne cannot choose in the end but bring you good Commodities, and good contentments, by your aduancing shipping and your fishing so usefull unto our Nation.(28)

ここで言う「見返り」が物質的な収益であることは明らかである。また，作者不詳のスミスを称える詩にもヴァージニア植民によって“the golden Iasons fleece”を得ることが出来ると書かれている。(29)このJasonは，言うまでもなくギリシア神話のジェーソンが金の羊毛を捜し求めたことへの言及であり，ヴァージニア植民も「金の羊毛」に匹敵する利益を

英国にもたらすことができることを意味している。このように見てくると「異教徒の改宗」はあくまでも植民の建前であり，本音は植民活動から得る物質的な利益であることが理解できる。イギリスにとってそれはヨーロッパ諸国依存の経済からの自立的経済への脱皮であり，ヴァージニア会社への個人の出資者及び植民者には物質的な利益である。ヴァージニア植民の目的が本来キリスト教の普及になかったことは誰の目から見ても明白なことであった。ニュー・イングランドへのピューリタンの植民活動と異なり，ヴァージニア植民者にとっては「山の上にある町」を築くことが本来の目的ではなかった。その植民活動の主なる目的はあくまでもイギリス内外の政治，社会，経済と密接に連動していた。イギリスの国家の命運を賭けたと言っても過言でない事業であったのである。スミスにとってヴァージニア植民は「神の栄光」「祖国の名誉」及び「人々の利益」をすべて実現できるものであった。[30]停滞したヴァージニア植民事業を打破すべくスミスがヴァージニア会社に訴えた要請にも十分な物資，援助があればヴァージニア植民の更なる開発は可能であるとの自信に満ちた言葉が聞かれる。これはスミスの本音であろう。自他共に認めるイギリスを代表する植民地開拓者としてのスミスの顔がここに見られるのである。ヴァージニア植民のスミスの意図はイギリスの領土拡張とイギリスへの物資の調達にあったが，「異教徒の改宗」について全く言及していないのかというと言及はあるのである。それはパウハタン王の娘のポカホンタスのイギリス人ジョン・ロルフとの結婚である。[31]インディアンとキリスト教徒との結婚，それはまさしく異教徒のキリスト教徒への改宗であった。ヴァージニア会社にとって植民の主なる目的たる異教徒の改宗を宣伝する事件はこれまではなかった。ポカホンタスは結婚後ロンドンに行く。改宗した異教徒をイギリス国民に見せようという意図からか彼女をロンドンに連れて行ったのはヴァージニア植民がいかに初期の目的に成功しているかの証拠を国民に示したかったのであろう。しかし，ポカホンタスの改宗はほんの一部にすぎない。逆に多くの植民者がインディアン側に逃亡したという。ポカホンタスの血をひくアメリカ人が現在200万はいると指摘する人もいる。[32]文明が非文明に，キリスト教が非キリスト教に敗れるという皮肉な結果でもある。スミス及びヴァージニア植民関係者にとってインディアンのポカホンタスのキリスト教徒ロルフとの結婚は「異教徒改宗」の絶好の宣伝となり，彼らの「異教徒改宗」努力の証でもあった。スミスは，『通史』でポカホンタスの結婚に触れ，ポカホンタスは英語を話すことができるようになり，キリスト教をよく教えられ，イギリス人のやり方にならって非常に「折り目正しく」なり，「礼儀正しく」なったと言っている。[33]これこそヴァージニア植民の本来の目的であったが，しかし，インディアンの改宗に関しての記述はこれしかなく，植民者の関心はインディアンの領土の獲得と本国への物資の調達及び現地の調査であった。

（3）

ヴァージニア植民を取り巻く資金的援助の不足，現地からのヴァージニア植民についての絶望的な報告が飛び交い，ヴァージニア植民が悪化の道をたどり，一般の人々のヴァージニア植民への関心が薄れ始めつつあったなかでヴァージニア植民を大々的に擁護した人物に William Strachey がいる。彼はバーミューダ島での難破の後1610年にヴァージニアへ到着し，秘書及び記録官を勤め，翌年11月に帰国した。翌1612年彼は『英国ヴァージニア旅行記』（*The Historie of Travell into Virginia Britania*）を出版する。そこで Strachey はヴァージニア植民の目的，意義，正当性を論じ，沈滞化した植民熱を再度燃え立たせようとする。ヴァージニア現地から帰国したばかりの人物の手になる『旅行記』は宣伝文書的な性格を有し，執筆にあたってスミスやハリオット等を利用したと言われているが，その内容は英国の植民の正当性，ヴァージニア現地の調査，インディアンの生活・習慣記述にわたっている。最初の問題はヴァージニア領土権を主張するスペインに対してである。Stracheyにとって，ヴァージニア植民はスペイン領土への侵害ではなく，すでにCabotによって発見されている英国の領土である。ヴァージニア植民は原住民にとって不当ではないのかとの疑問について，彼はインディアンはキリスト教の恩恵を付与されるべく異教徒であり，非文明人を文明人へと教化することはインディアンにとっても望ましいことであると言う。ヴァージニア植民への人々の関心を低下させていた理由にはヴァージニアの領土権を主張するスペインと先住民インディアンの土地への侵入に対する正当的な理由及び植民からの即座の利益の可能性の二点であった。Strachey はそもそもヴァージニア植民の目的をどこにおいていたか。この重要な問題について Strachey は徹底して異教徒改宗という宗教的使命を強調する。彼以前にも植民の宗教的使命に言及していた者はいたが，Strachey の植民の宗教的使命観をかれほど強調した者はいない。この点に関しては，ヴァージニア会社を擁護した説教家達を連想させる。彼は次のように言う。

yt being the pious, and only end,...to endeavour the conversion of the natiues, to the knowledg and worshippe of the true God, and the world's Redeemer Christ Iesus.(34)

原住民の真の神の知識と崇拝，この世の救い主キリストへ改心させることが植民の「敬虔な唯一の目的」となる。Strachey にとってヴァージニア植民の本来の目的は異教徒の改宗である。これはハクルートが『西方植民論』で強調した植民の目的であり，以後様々な冒険家，植民者が繰り返し主張してきた点であり，我々は Strachey の異教徒改宗としてのヴァージニア植民論を聞いてもとりわけ驚きはしない。彼の宗教的使命としてのヴァージニア植民論は第一巻全体に行き渡る主張であるが，植民者にはインディアンを「サタン

の幻惑」から解放し，無垢なるインディアンの心を勝ち得，キリスト教徒の知識を共にする道が切り開かれているとも言う。[35] Strachey は，更に聖書を援用し，唯一真なる神とイエス・キリストを知ることが幸福のすべてであり，「すべての国民に洗礼を施す」ことがインディアンにも適応できることを述べる。[36] キリスト教の普及の名のもとにたとえそれが原住民に危害を及ぼすことになろうとも未開状態の改善に至ることになるので許されることになる。[37] Strachey は，キリスト教伝道師のように聖書からの引用と過去の世界の歴史からヴァージニア植民の前例を探し，それらを根拠にヴァージニアにおける異教徒改宗の正当化を主張するのである。Strachey は1612年というヴァージニア植民が危機的状況に陥った時期にヴァージニア植民の原点に戻り，ジェームズ一世の特許状に書かれていた異教徒の改宗を植民の主なる目的にする。この論点はヴァージニア会社擁護の説教家及び当時のヴァージニア会社·植民関係者の文書に必ずと言っていいほど言及されたことで，特別新しいことではない。我々はむしろ Strachey が『旅行記』のなかで述べているもう一点に注目したい。それは植民の目的を宗教的使命に置いておきながらも，やはりイギリスの経済と個人の利益をもまた忘れていないことである。ハクルート以来イギリスはヨーロッパ諸国への経済依存からの離脱をヴァージニア植民に求めていたが，Strachey も同じ論点に立ち，ヴァージニア植民がイギリス経済の自給自足をもたらす契機になると言う。

Our country of Virginia hath no want of many Marchandizes (which we in England accomplish in Denmark, Norway, Prusia, Poland, etc., fetch far, and buy deare,...[38])

Srachey は，イギリス経済がいかにヨーロッパ諸国に依存しているかを第一巻十章で更に述べる。モスクワとポーランドにはピッチやタール等，スイスには鉄と銅，その他スペイン，イタリア，オランダにイギリスが依存している物資がある。しかしイギリスが他国に依存している物資はすべてがヴァージニアで手に入り，航海の危険や海賊に襲撃される危険を犯す必要もない。なおヴァージニアは兵士を育成し，水夫には実践の場を提供し，商人には交易，善人には異教徒をキリスト教に改宗させることへの報いがあり，イギリスが必要とする物資の調達以外に人口急増に伴う失業をも解消してくれる場でもある。

All these temporaize with others for necessity, but all as vncertayne as Peace and Warre besides the Charge, travell and daunger in transporting them by Seas, Landes, Stormes, and Pirates: then how much may Virginia haue the prerogative for the benefitt of our Land, when as within 100 myles all these are to be had either ready provided by nature, or ells to be prepared were there but indusrious men to labour, so as then here a place, a nurse for soldires, a Practize for Mariners, a Trade for

Merchauntes, a Reward for the good and that which is most of all, a busines most acceptable to god, to bring poore Infidels to his knowledge,...[39]

ヴァージニアがイギリス経済の自立の契機となることをStracheyは述べるが，しかしそれがヴァージニア植民の本来の目的ではない。Stracheyは植民の経済的目的を極力押さえ，その宗教的使命を本来の目的とする。彼は，スペインが中南米で金を発見したようにヴァージニアにも金発見の可能性があることを示唆し,[40]植民に人々の関心を引きつけようとする。すべては“Tyme the true Reveylor of great thinges”[41]に任せる以外に道はなく，やがては植民の結果も明らかになるという。今は植民活動が停滞しているがやがては「福」をもたらすことになる。ヴァージニア植民に即座の結果を求めるべきではなく，長い眼で植民を見つめればいずれは良い結果が生じてくるというのである。Starcheyは，植民の経済的活動を二次的にとらえ，経済的な目先の利益に先走る人達に警告を発することも忘れはしない。

...such is the busines [of Virginia] , as yt should awake all charitable Christians to follow yt according to the goodnes of the Cause, and not according to the greatnes of profit and Commoditye.[42]

Starcheyは第一巻を終えるにあたり，再度植民の目的に触れる。植民の目的は道徳的に善に成りうる可能性を持ち合わせているインディアンの教化・改宗にある。

to teach them [Indians] both which is the end of our Plantation amongst them, to let them knowe what Vertue and Goodnes is, and the Reward of both: to teach them Religion and the Crowne of the Righteous, to acquaint them with Grace, that they may participate with Glorye: which God graunt in Mercy vnto them....[43]

Stracheyは『旅行記』の前年1610年，*A true reportory of the wracke, and redemption of Sir Thomas Gates Knight; upon, and fro the Ilands of the Bermudas: his coming to Virginia, and the estate of that Colonie then, and after, under the government of the Lord La Warre* を書き，バーミューダ島及びヴァージニアでの見聞を虚飾なく描いたがためにヴァージニア会社はその出版を望まなかったといういわくがあった[44]。そのような事情を考慮してか『旅行記』のヴァージニア報告はヴァージニア会社を喜ばせ，一般の人々のヴァージニア植民への行動欲をあらたに奮い立たせるにあたり大きな影響を及ぼしたと思われる。丁度同じ頃ヴァージニア会社が当時著名な説教家にやはりヴァージニア植民の宣伝的説教を依頼し，説教家

がこぞって植民の意義を訴え，異教徒の改宗こそが植民の真の目的であると雄弁を奮っていたことと軌を一にしている。Stracheyの『旅行記』の本音はしかしながら異教徒の改宗にはない。植民の裏の目的を十分認識してたStracheyは，その真の目的を押さえ，代わりに宗教的使命を植民の目的とする。このあたりヴァージニア植民の苦悩がうかがわれると言ってもいいだろう。ヴァージニア会社としては資本主義的な植民開発を植民に期していたが，それを前面に出すのを控え，キリスト教的伝道精神を植民の目的とする。中南米におけるスペインに対抗してか，より人道的なキリスト教的な使命をイギリスの植民の目的とした背景には海外植民に対する英国の苦渋があった。Stracheyの『旅行記』はこのような事情を反映した旅行記であると言える。

（4）

1625年，聖職者のサミュエル・パーチャス（Samuel Purchas）はイギリスの植民記録を集めた『ハクルート遺稿　パーチャス巡礼　イギリス国民及び他国民による航海と旅行の世界歴史を含む』（以後『パーチャス巡礼』と略記）（*Hakluytus Posthumus or Purchas His Pilgrimes Contayning a History of the World in Sea Voyages and Lande Travells by Englishmen and others*），20冊を出版する。それはタイトルにもあるように，イギリスの航海者・海外進出者記録の集大成『イギリス国民の主要な航海・貿易及び発見について』（*The Principal Navigations, Voiages, Traffiques and Discoveries of the English Nation Made by Sea or Overland to the Remote and Farthest Distant Quarters of the Earth at any Time within the Compass of these 1600 Years.* 1589年1巻，1598－1600年3巻追補）を出版し，イギリスの海外植民・交易熱に拍車をかけたリチャード・ハクルート（Richard Hakluyt）の仕事を受け継ぎ，ハクルート以後の17世紀初頭のイギリス人による海外冒険者たちの記録を編纂したものである。[45]出版年の1625年と言えばヴァージニア会社が解散した1年後であるが，パーチャスは『パーチャス巡礼』で過去のイギリス人による航海・海外進出・探検をハクルートに倣って編集している他に，彼自らの植民論を展開している。パーチャスはヴァージニア植民については1606年から1624年までを18冊と19冊で述べているが，我々にとって興味深いのは19冊9巻20章である。ヴァージニア植民にイギリスが着手して以来ほぼ20年の歳月が流れ，紆余曲折を経ながらもヴァージニア植民は継続されてきたが，ここにパーチャスはイギリスの海外植民論を詳細に述べ，イギリス植民及びヴァージニア植民に強力な援護を行い，本論にとっては欠かせない重要な章となっている。ハクルートの論点はそれほど新規な論ではなく，ハクルートがイギリスの将来を海外植民と海外貿易に賭けたと同様パーチャスもこれまでと同様の主旨の論を展開する。彼はヴァージニア植民及び植民一般の正当性，必要性を論じるが，ヴァージニア植民についてはこれまでの公式文書に見られた目的，すなわち異教徒のキリスト教への改宗を第一の目的としていることに注目し

たい。ヴァージニア植民は“so Noble a worke”[46]であり，キリスト教を広め，異教徒を教化するにあたりイギリス国王の栄誉に資する事業であることを最初に明確化する。

We greatly commending and graciously accepting of their desires to the furtherance of so Noble a worke, which may by the providence of Almightie God hereafter tend to the glorie nof his Divine Majestie, in propagating of Christian Religion, to such people as yet live in darknesse, miserable ignorance of the true knowledge and worship of God, and may in time bring the Infidels and Savages (living in those parts) to humane civilitie and to a settled and quiet government,...[47]

これは1606年の第一次特許状の文言と変わらない。我々は何度も「異教徒の改宗」について聞かされてきたが，スミス同様1622年のインディアンによる大虐殺事件があってもなお「異教徒の改宗」を植民の目的にあげているパーチャスにイギリス人の寛容精神を見る気がするが，裏を返せばイギリス人のスタンドプレィとも映る宣言である。いずれにせよヴァージニア植民の目的は「異教徒改宗」である。この主張は第19冊 9 巻20章で更に強調される。この章でパーチャスは聖書を援用してヴァージニア植民の正当化，合法化について述べる。20章のタイトルは，「アメリカのイギリス植民とりわけヴァージニアとサマー諸島からイギリスに生じるであろう利益を示す論述」とあるように，ヴァージニア植民がいかにイギリスにとって利益のある植民事業であるかの論証である。パーチャスにとって植民は神抜きでは考えられない。最初にして最後の考慮すべくは神であり，神から植民の命令を受け，植民が神に栄光をもたらすかが問題となる。パーチャスは創世記第一章の「地に満ちよ，地を従わせよ」という神の言葉を援用し，ヴァージニア植民の正当性を述べる。これによりキリスト教徒は他国へ進出することに何ら問題はなくなる。他の国の土地を自国のものとすることは神の命令を実践していることに他ならないからである。他国の植民化はこの神の言葉によって許される行為となる。

Hence is it that Christians (such as have the Grace of the Spirit of Christ, and not the profession of his merit alone) have and hold the world and the things thereof in another tenure, whereof Hypocrites and Heathens are not capable of.[48]

キリスト教・文明の価値観から非キリスト教・非文明を一方的に裁断する論理である。聖書を楯に非キリスト教徒の住む地を植民地化するためにキリスト教徒が考案した征服のロジックである。この論理はまたキリスト教の神が唯一真であるという結論にも至るキリスト教の未開宗教への暗黙かつ絶対的優位に基づく論理でもある。多種多用な価値観が存在す

る現代社会には到底通用しようにもない論理が17世紀初頭には十分に効力を発揮していた。聖書に記されていればそれを盾にいかなることも可能であった。植民地化された原住民がいかなる思いをイギリス人に抱いていたかは知る由もないが，聖書の言葉は文明が非文明を文明の恩恵に与させることができるという信念に裏打ちされたキリスト教徒イギリス人の植民合法化・正当化の根幹であり，他国のいかなる人も異を唱えることができないほどの効力を発揮していた。別の角度から見ればキリスト教がいかにまだ十分な価値判断の基準でありえたことを示す証でもあったが，キリスト教の名の下にあらゆることが許容された時代でもあった。パーチャスはヴァージニア植民擁護にあたり最初に聖書を持ち出すことにより，他国の植民地化を正当化し，次にヴァージニア植民の具体的な擁護に入る。ヴァージニア入植は「野蛮で未開な堕落している人達」をキリスト教徒にすることである。しかしながら，そもそもイギリスはヴァージニア入植への権利を有しているのか，という疑問が出てくる。これはスペインがすでにヴァージニアの領土権を主張していることへの反論でもあるが，イギリス国内にはスペイン寄りの一派がおり，しかも他人の土地への侵入であるとも言える入植であり，ヴァージニア入植権利は大きな問題であった。パーチャスは，上に挙げた未開人のキリスト教化と関連する「すべての地球を満たす自然の権利」を持ち出す。そしていかなる国も他人によって所有されていなければ自然法と人類法により植民権利が生じ，後の入植者によって土地の所有権を奪われることはない。これは創世記の「地に満ちよ」と先住権による入植の正当化である。ここで問題なのはヴァージニアにはすでに先住民が居住している事実である。これに対してのパーチャスは次のように述べる。ある国のいくつかの土地に人が住んでいて，他の土地に人が住んでいない場合，上記の他人による先住権がない場合入植権が生じてくる。特に先住民が未開人で定住所有権がない場合には入植は可能となる。二番目の入植権利は商品売買の権利（Merchandise）である。これは端的に言えば，ある国が物資に事欠くときそれは他国との交易によって充当できるというものである。パーチャスによれば神はすべての国の産物を分散させたので，富める国もあれば貧しい国もある。しかし重要なのは全世界は「人類一つの共同体であり，各国は公共善のために他国と話し合う」ことができるということである。[49]イギリスの場合，自国における物資の不足のためにヨーロッパ諸国に依存しているが，その物資がヴァージニアで補充できれば産物の売買権は否定できなくなってくる。パーチャスは，原住民がヴァージニアの豊かな産物を有効に活用せず，他国に利用させないことは不信心な非人間的なことであると言う。

It is therefore ungodly, and inhumane also to deny the world to men, or like Manger-dogges (neither to eat hay themselves, nor to suffer the hungry Oxe) to prohibite that for others habitation, whereof themselves can make no use; or for merchandise,

whereby much benefit accreweth to both parts.[50]

これは物資に事欠くイギリスにとってはヴァージニア入植の格好の口実となる。さらにパーチャスは論を進め，豊富な物資を有していながら他国にそれを分譲しない場合人類の慣習法によって懲罰の対象となるとも言う。かかる論法によりイギリスはヴァージニアへの正当な入植権を主張できると同時に，侵入，征服も正当化され，自然法，国際法からも保証される。

That natural right of cohabitation and commerce we had with others, this of just invasion and conquest, and many others praevious to this, we have above others; so that England may both by Law of nature and Nations challenge Virginia for her owne peculiar propriety,...[51]

これまでパーチャスは聖書，自然権，国際法によりイギリスのヴァージニア入植権を主張してきたが，更にパーチャスは，（1）イギリス人，セバスチャン・カボットによるヴァージニア発見（2）実際的なヴァージニアの所有（3）所有の継続（4）時効による所有権取得（5）原住民の自発的服従（6）原住民の権利中断（7）所有権委譲（8）現地誕生のイギリス人による自然相続（9）実際の売却（10）合法的な土地譲渡（11）王への原住民隷属，からイギリスのヴァージニア植民の権利の正当性を強調する。[52]

ヴァージニアへの入植の権利を主張した後パーチャスは入植の目的に移る。入植の目的は既に触れたようにキリスト教植民の建設であり，原住民のキリスト教徒への改宗である。ヴァージニア原住民は「文明」「技芸」「宗教」に無知で，「サタンの圧制」に心を奪われている。イギリス人の勤めは彼らを「暗黒の力」から解放することである。[53]かくして原住民も悪魔も克服され，ヴァージニアを一人の夫と婚約させ，キリストへ純潔な処女として捧げるのである。ヴァージニアがキリストの花嫁となることによってヴァージニアにおけるキリスト教的使命は完結する。ヴァージニア植民の宗教的使命はあくまでも本来商業的色彩の強い植民遂行のための隠れ蓑，煙幕であり，建前であると私は考えているが，パーチャスは聖職者にふさわしく聖書からの適切な引用によりヴァージニア植民の宗教性を巧みに浮かび上がらせる。しかしパーチャスはヴァージニア植民の真の意図を知っていた。なぜなら彼は次に植民のもう一つの目的，一般の人々の第一の関心事である植民から得られる物質的利益についても論じているからである。スペインが中南米を制圧し，そこから産出される金・銀によってヨーロッパの大国の地位にまで上りつめたスペインの植民の成果をイギリスはヴァージニアで挙げようとしていた。E.ウィリアムズによれば，スペイン王室が中南米の金から得た収入は1503年にはわずか8,000ドゥカードであったのが1608年

には200万ドゥカード，1626年には250万ドゥカード以上との記録が残っている。[54]スペインという「貯水池」の「水源」が中南米にあったのである。1595年ローリ（Sir Walter Raleigh）によるギアナ帝国の発見の目的はまぎれもなく金の発見であり，ローリは金・銀の重要性をイギリスは十分に知っていた。西方植民の歴史を背景にすればヴァージニアの植民者，冒険者，投機者の植民の夢が金・銀の発見にあったことはとりわけ驚くことではない。ところがヴァージニアには金・銀は産出されず，植民関係者の失望は殊の他大きく，これがヴァージニア植民熱低下の大きな原因となっていた。大国スペインが北米の植民地建設に消極的であった理由の一つは金・銀発見の可能性が北米には少なかったからである。ヴァージニア会社としては何としても金・銀と言う目に見える植民の成果がほしかった。金・銀発見の可能性は一縷の望みであったが，結果は人々の期待を裏切るばかりで，金・銀発見の吉報はついに本国には届くことはなかった。パーチャスは，しかしながら，金・銀発見ができなかったことに対して悲観的になることはなく，むしろ金・銀など発見できなかったことは幸いであると述べる。それはなぜか。金・銀は諸悪の根源で，人間の欲望をむきだしにさせ，金・銀のために暴力に訴え，近隣諸国とは争いを起こさざるをえない。金・銀は人間の欲望の象徴である。[55]これはトマス・モアが描くユートピア人のスペインの金・銀称賛への諷刺を思い起こさせる。なにしろユートピアでは，金・銀は「汚らわしい不名誉なもの」で，彼らは便器や罪人用足かせや鎖に使用するほど価値のないものである。パーチャスは金・銀が人々にもたらす弊害を説き，物質的な富よりも精神的な富を強調する。たとえばユダヤ人にとっての「約束の地」であるカナンには金はなかったが，代わりに豊かな土壌に恵まれ，「ミルク」と「はちみつ」が流れ，人々は “bottomlesse gulfes of lust”[56]にさいなまれることはなかった。これこそが真の意味での豊かさであり，人間を欲望のとりこにする金・銀は少しの精神的豊かさを与えてくれない。人間の真の幸福を考えるとき，金・銀は逆に人間の心をむさしくさせ，人間は金・銀のために真の人間性を忘れてしまうというのである。パーチャスにとってヴァージニア植民の目的は金・銀の発見ではない。それは神の国建設であり，隣人愛であり，国民・国王・国家の名誉である。ヴァージニアに金・銀は発見されないがそれに匹敵するほどの様々な産物にあふれている。温暖な気候，肥沃な土壌，豊富な動植物，「楽園」のトポスとしてのヴァージニアの称賛が続く。パーチャスは，Stracheyのようにヴァージニアの産物によるイギリスの経済的自立には触れないが，ヴァージニア植民が国内の人口増加による失業者には雇用の供給，犯罪者には再生の場を提供してくれ，更には水夫の養成，兵士の訓練をももたらす契機ともなりうる。パーチャスにとってヴァージニア植民は資本主義的帝国主義的なイギリスの海外進出ではなく，その重要性は宗教的な使命にある。それ故パーチャスは出来うる限り他国を刺激するようなことはしていない。パーチャスは職業が牧師ということもあり，彼の主張はヴァージニア植民の宗教性をとりわけ強調したものとなっている。パーチ

ャスが『パーチャス巡礼』を書いた1625年はヴァージニア会社が王の特許状を取り消され，会社が解散した１年後のことであり，ヴァージニアは民間の手による発展の道を歩むことになる。パーチャスはハクルートの後を引き継ぎ，17世紀初頭のイギリスの海外進出の歴史を描いたわけであるが，一般の人々にとってヴァージニア植民の実体が明らかになりつつあり，もはや「楽園」としてのヴァージニアは非現実的な幻想でしかなかった。そのようなヴァージニアを取り巻く厳しい現実のなかですら－その現実があればこそと言うべきか－パーチャスは理想的な「神の国」建設を植民の第一目標とする。人々の最大の関心事である植民からの物質的な利益については触れもせず，ひたすらキリスト教の伝道を説くパーチャスに当時の読者がいかなる反応を示したかは知る由もない。ハクルートに始まった植民の意義，目的をふまえての一聖職者の “Apology for Virginia Plantation” とも言うべく論考がパーチャスのヴァージニア植民論であり，それは当時人々がヴァージニア植民に対して抱いていた植民への不安，疑問を払拭し，植民へのイギリス人の行動欲を一層鼓舞するものであったと言える。ヴァージニア植民の経緯を見るとイギリス国内でのヴァージニア会社植民特許状取り消し，植民への冷静な観察，ヴァージニアの現状，ヴァージニア統治の内紛等からヴァージニア植民が一層厳しい状況に置かれていたなかでパーチャスは人々に聖職者にふさわしいキリスト教精神にあふれた理想的な植民論を展開する。

（5）

1606年のジェームズ一世の特許状により国をあげてのヴァージニア植民が始まり，イギリスは本格的に北米の植民活動に着手した。ハクルートの書が明らかにしているように，1606年以前にもSir Humphrey Gilbert, Sir Walter Raleigh, Sir Richard Grenvilleによってイギリスによるヴァージニア遠征は行われているが，1606年以降のヴァージニア植民はその規模においてイギリス植民のなかでも特に大々的なものである。Captain Newport, George Percy, John Smith, Lord Delaware, Thomas Gates等様々な植民者がヴァージニアに赴く。彼らはいかなる目的をもってヴァージニアへ赴いたのか。これまで見てきたようにイギリスのヴァージニア植民は単なる宗教的な次元にとどまるものではなく，17世紀イギリス初頭の政治，社会，経済，宗教に関わる植民であった。農地の囲い込みによる失業者，浮浪者，犯罪者の急増，人口増加による都市部への人口移動，イギリスはこれまでにない失業者と人口増加の対処に迫られていた。[57]経済的にはイギリスは国内で必要とする主要物資をヨーロッパ諸国に依存していた。更には自国の主要産物である毛織物売却の不振，宗教的にプロテスタントとカトリック教との対立，そして眼を外に向けるとスペインがいた。イギリスより一世紀も早く16世紀初めから中南米に進出し，ほぼ中南米を制圧し，その金･銀をほしいままにしたスペインは，一躍ヨーロッパの大国にまで登り詰める。イギリスが現状に留まればイギリスがスペインや他の国々からも遅れをとり，ヨーロッパ

の二流国の地位に甘んじなければならないことは誰の眼にも明らかであった。このような国の様々な問題を一挙に解消し，イギリスをスペインと同等の地位にまで引き上げてくれると思われたのがヴァージニア植民であった。ヴァージニア植民こそイギリス国家の明るい未来を約束してくれるはずであった。それゆえ，ヴァージニアの目的は最初からわかりきったことであった。植民地獲得による国内の社会問題の解決，スペインが中南米から獲得した金・銀に匹敵する金･銀の発見，ヴァージニア会社投資者への利益の配当，これらはすべてヴァージニア植民は本来社会的商業的性格の強い植民であったことを示している。現地からの報告書，詩人，パンフレット作者，それに説教家までもが楽園ヴァージニアの宣伝に走る。肥沃な土壌はナイルやユーフラテスをも凌駕し，植物は繁茂し，魚，鳥，獣に不足することはない豊穣な土地ヴァージニア，温暖な気候，健康的な空気，すべてがヴァージニアを理想化する。ヴァージニアはまさに「楽園」であった。ヴァージニアでの豊富な物資がイギリス経済の自立を促進してくれる。ヴァージニアでの入植が成功すれば国内に居住できない貧困者・犯罪者・浮浪者に定住の場を供給できる。(58)いわゆるピューリタン革命のさなかにクロムウェルですらアイルランドのカトリック教徒や国内の犯罪者をヴァージニアへ送ろうと計画していた。さらには国内の余剰産物特に毛織物をヴァージニアで処理できる。いかなる点から見ても宗教が入り込む余地はない。ところが植民関係者はこぞってキリスト教の普及，異教徒の改宗を植民の最大の目的とする。イギリス植民論のさきがけとなった『西方植民論』でハクルートはイギリスの植民地拡大を宗教とからませ，植民の目的はキリスト教の普及であると言った。彼にとっては北米に植民地を築くことは神の意図を実現することに他ならなかった。ハクルート以後の植民論は多かれ少なかれこのハクルートの植民論に依拠していることは明らかである。本来は宗教的な色彩の弱いヴァージニア植民をかたくなまでに異教徒のキリスト教への改宗という観点からとらえていることは何を我々に語ってくれるのか。新世界に神の国を建設することが植民の目的と言ったが，これはイギリスが神の国ではないことを物語っているのか。イギリスに神の国を見出すことができないから新天地に神の国を築こうという意味なのか。これは見方を変えればイギリスという国を否定する見解になる。つきつめればイギリスへの決別である。ヴァージニアは新しい「カナン」「楽園」「ユートピア」である。あるいはキリスト教国としての理想国のイギリスをさらに理想化した国家をヴァージニアに建設しようという意図だったのか。それにしても当時のイギリスがキリスト教国家として非の打ち所のない国家であったとは言い難い。むしろ社会的にも経済的にもイギリスは混迷のなかにいた。ジェームズ一世は1625年にこの世を去り，息子のチャールズ一世が後を継ぐが，国内政治はピューリタンからの攻撃を迎える。このように考えてくるとヴァージニア植民は宗教的使命をその主要な任務としたのではなくむしろイギリスが資本主義国家として世界に飛躍するための基盤作りがその根底にあったと言えるのではないか。それはまたハクルートが

語っていたように帝国主義国家としてのイギリスの始まりでもあったとも言える。ヴァージニア会社としては植民の目的をその経済性に置くこともできた。そのほうがヴァージニア会社への投機熱をあおり，植民資金の獲得も容易であったはずである。ところがヴァージニア会社はその本来の目的を忘れたかのごとく頑迷にも異教徒改宗を植民の最大の責務とする。思えばイギリスより早くカリブ海を支配したカトリック大国スペインの中南米植民活動の目的はイギリスと同じく表向きは異教徒の改宗であった。スペインが異教徒改宗の名の下に何を中南米で行ったかは歴史が雄弁に物語っている。結果として中南米からの「金」「砂糖」「奴隷」を武器にスペインはヨーロッパの強国になってしまう。(57)異教徒改宗は植民の建前であり，本音は帝国主義的な海外植民地獲得であった。スペインにならいイギリスも西方植民に奔走し，当初のドレーク（Sir Francis Drake）等の単なる海賊行為からハクルートの『西方植民論』をまってイギリスが本格的に北米への植民化を始める。そしてその目的は「神の国」建設であった。ヴァージニア植民たけなわの頃，東インド会社取締役・理事のトマス・マンは「イングランドの東インドとの貿易に関する一論」（1621年）や「ロンドン商人東インド会社の請願と進言」（1628年）を書き，イギリスの外国貿易の重要性を指摘している。(59)マンは，ヴァージニア会社のようにキリスト教的な使命を海外進出の目的とはせず，明確に外国貿易による国富と国力の増大を求めている。ところがヴァージニア植民の場合は「神の国」建設を見せ玉にしたイギリスの社会的経済的利用の対象としての資本主義的帝国主義的な植民地獲得であった。１７世紀英国が直面した諸問題の解決，言うなれば英国の存亡を賭けた植民活動を背後に追いやり異教徒のキリスト教への改宗にこそ植民の目的があることを高らかにうたい，それを隠れ蓑として利用した植民であったと言える。

注

(1) *Discouse of Western Plantation*は以下に所収のものを使用した。David B. Quinn (ed.) : *New American World* Vol.III. pp.71-123. なお，以下の日本語訳も参照した。ハクルート『西方植民論』(東京：岩波書店『イギリスの航海と植民　二』，1985, pp17-229.)

(2) E.ウィリアムズ　川北稔訳『コロンブスからカストロまで　I』(東京：岩波書店，2000)，p. 86.この書は1492年から1969年までの主としてスペインによるカリブ海制圧の歴史であるが，初期のスペインの中南米侵略とイギリスを含む他のヨーロッパ諸国との覇権争いも描かれている。

(3) Richard Hakluyt: *The Principal Navigations, Voyages, Traffiques & Discoveries of the English Nation* (London & Toronto: J.M.Dent and Sons Limited, 1927),Vol.I. p.22.

(4) Hakluyt, Vol.I, pp.39-40

(5) ウィリアムズ，p. 88.

(6) Arthur Barlowe: *The first voyage made to the coastes of America*のテキストはDavid B. Quinn (ed.) : *New American World* Vol.III. pp.276-282を使用した。なお，以下の日本語訳も参照し

た。バーロー『アメリカ海岸への最初の航海』（東京：岩波書店『イギリスの航海と植民Ⅱ』）

(7) Quinn, p. 279. バーロー， p. 249.

(8) Quinn, p.279, p.280. バーロー， p.252.

(9) K. R. Andrews: *Trade, plunder and settlement* (Cambridge: Cambridge University Press, 1991), p. 207.

(10) David B. Quinn (ed.) : *New American World* Vol.III. p.300. レーン『ロアノーク島入植記』（東京：岩波書店『イギリスの航海と植民　二』, 1985, pp.265-300.）

(11) L.G.Tyler: *Narratives of Ealy Virginia 1606-1625* (New York: Barnes & Noble, Inc., 1966), p. 20

(12) Philip L. Barbour: *The Jamestown Voyages under the First Charter 1606-1609*, Vol.I, pp.213-234)

(13) Tyler, p. 231.

(14) Tyler, p. 214.

(15) John Smith: *A Trve Relation of such occurrencess and accidents noats as hath hapned in Virginia since the first planting of that colony,...*[Edward Arber ed.: *Capt. John Smith's Works* (New York: AMS Press, 1967)], p. 4. スミス『真実の話』（東京：岩波書店『イギリスの航海と植民　二』, 1985), p. 405.

(16) Arber, p. 4. スミス， pp. 405-406.

(17) Arber, p. 40. スミス， p. 462.

(18) John Smith: *A Map of Virginia* (Amsterdam: Walter J. Johnson, Inc. Theatrum Orbis Terrarum Ltd., 1973), p. 18.

(19) Smith, *A Map of Virginia*, p. 18.

(20) Smith, *A map of Virginia*, p. 19.

(21) John Smith: *The Generall Historie of Virginia, New-England, and the Summers Isles* (Ann Arbor: University Microfilms, Inc., 1966), p.21, 22, 25, 26, 29)

(22) Smith, *The Generall Historie*, p. 72.

(23) Smith, *The Generall Historie*, p. 72.

(24) Smith, *The Generall Historie*, pp. 82-3.

(25) Smith, *The Generall Historie*, p. 148.

(26) A. T. Vaughan: *American Genesis* (Boston: Little, Brown and Company, 1975), p. 176.

(27) Smith, *The Generall Historie*, A Preface of foure Poynts, I.

(28) Smith, *The Generall Historie*, A Preface of foure Poynts, II.

(29) Smith, *The Generall Historie*, A.

(30) Smith, *The Generall Historie*, p.150.

(31) Smith, *The Generall Historie*, p. 113.

(32) ピーター・ヒューム　岩尾龍太郎・正木恒夫・本橋哲也訳『征服の修辞学』（東京：法政大学出版, 1995), p. 418.　なお本書の第四章は「ジョン・スミスとポカホンタス」である。

(33) Smith, *The Generall Historie*, p. 121.

(34) William Strachey　L.B.Wright and V.Freund (eds.) : *The Historie of Travell into Virginia Britania* (Nendeln/Liechtenstein: Kraus Reprint Limited, 1967), pp. 7-8.

(35) Strachey, p. 18.

(36) Strachey, p. 23.

(37) Strachey, p. 25

(38) Strachey, p. 21.
(39) Strachey, p. 117.
(40) Strachey, p. 118.
(41) Strachey, p. 118.
(42) Strachey, p. 118.
(43) Strachey, pp. 132-133.
(44) Strachey, p. xxiii.
(45) テキストは Samuel Purchas: *Haklutus Posthumus or Purchas His Pilgrimes Contayning a History of the World in Sea Voyages and Lande Travells by Englishmen and others* 20 vols.（New York: AMS Press Inc., 1965）を使用する。
(46) Purchas, vol.xvii, Book 9, ch.1, p. 400.
(47) Purchas, vol.xvii, Book 9, ch.1, p. 400.
(48) Purchas, vol.xviiii, Book 9, ch.20, p. 219.
(49) Purchas, vol.xviiii, Book 9, ch.20, p. 223.
(50) Purchas, vol.xviiii, Book 9, ch.20, pp. 223-224.
(51) Purchas, vol.xviiii, Book 9, ch.20, p. 224.
(52) Purchas, vol.xviiii, Book 9, ch.20, p. 224, p.229.
(53) Purchas, vol.xviiii, Book 9, ch.20, p. 231.
(54) ウィリアムズ，pp.16-17.
(55) Purchas, vol.xviiii, Book 9, ch.20, p. 232.
(56) Purchas, vol.xviiii, Book 9, ch.20, p. 233.
(57) 人口増加について，サースクは次のように言っている。「1520年代のはじめ，イギリスの全人口はおよそ225万であった。1603年には350万と記されている。... 最も急激な人口増加は1520年から1640年の間に生じた。」[ジョオン・サースク『消費社会の誕生　近世イギリスの新企業』（東京：東京大学出版会，1984），p.206] なおロバート・グレイは *A Good Speed to Virginia*（1609）でイギリスの人口急増の解決策として過剰人口のヴァージニアへの移住を強調している。(Robert Gray: *A Good Speed to Virginia* ed. Wesley F. Craven in *Early Accounts of Life in Colonial Virginia 1609-1613*（New York: Scholars' Facsmiles & Reprints, 1976), B3.
(58) 浮浪者，犯罪者等の植民地移住については以下の書に扱われている。［A.L.バイアー　佐藤清隆訳『浮浪者たちの世界　シェークスピア時代の貧困問題』（東京：同文館，1997）特に第9章参照。
(59) トマス・マン　渡辺源次郎訳『外国貿易によるイングランドの財宝』（東京：東京大学出版会，1965), pp. 153-279.

References

J. Adair: *Founding Fathers The Puritans in England and America*（London: J. M. Dent & Sons Ltd., 1982)

C. H. Andrews: *The Colonial Period of American History*（New Haven: Yale University Press, 1934)

Philip L. Barbour: *The Three Worlds of Captain John Smith*（Boston: Houghton Mifflin Company,

1964)

Philip L. Barbour: *The Jamestown Voyages under the First Charter 1606-1609* 2 vols (Cambridge: At the University Press, 1969)

Philip L. Barbour: *Pocahontas and Her World* (Boston: Houghton Mifflin Comapny, 1969)

R. Bevereley: *The History and Present State of Virginia* (Chapel Hill: The University of North Carolina Press, 1947)

The Three Charters of the Virginian Company of London with Seven Related Documents; 1606-1621 with an Introduction by Samuel M. Bemiss (Virginia, 1957)

Daniel J. Boorstin: *The Americans: The Colonial Experience* (New York: Vintage Books, 1958)

C. B. Bridenbaugh: *Vexed and Troubled Englishmen 1590-1642* (New York: Oxford University Press, 1968)

A. Brown: *Genesis of the United States*, 2 vols. (Boston and New York: Houghton, Mifflin and Company, 1890)

A. Brown: *Early Politics in Early Virginian History* (Boston and New York: Houghton, Mifflin and Company, 1901)

P. H. Bruce: *Institutional History of Virginia in the Seventeenth Century* 2 vols. (Massachusetts: Peter Smith, 1964)

C. Cherry ed.: *God's New Israel Religious Interpretation of American Destiny* (Capel Hill and London: The University of North of Carolina, 1998)

F. Chiappelli ed.: *First Images of America*, 2 vols. (California: University of California Press, 1976)

W. F. Craven: *Dissolution of the Virginia Company* (Massachusetts: Peter Smith, 1964)

J. H. Kettner: *The Development of American Citizenship* (Chapel Hill: The University of North Carolina, 1978)

S. M. Kingsbury (ed.): *Records of the Virginia Company of London*, 4 vols (Washington.D.C.: Government Printing Office, 1906-1935)

S. H. Palmer and D. Reinhartz eds.: *Essay on the History of North American Discovery and Exploration* (Arlington: the University of Texas, 1988)

G. B. Parks: *Richard Hakluyt and the English Voyages* (New York: American Geographical Society, 1928)

E. J. Payne (ed.) : *Voyages of the Elizabethan Seamen to America* (Oxford: At the Clarendon Press, 1893)

G. W. Prothero (ed.) : *Select Statutes and Other Constitutional Documents Illustrative of the Reigns of Elizabeth and James I* Third Edition (Oxford: At the Clarendon Press, 1906)

David B. Quinn ed.: *The Hakluyt Handbook*, 2 vols. (London: Hakluyt Society, 1974)

David B. Quinn: *Set Fair for Roanoke Voyages and Colonies, 1584-1606* (Chapel Hill and London:The University of North Carolina Press, 1985)

David B. Quinn: *England and the Discovery of America 1481-1620* (New York: Alfred A. Knopf, 1974)

A. L. Rowse: *The Elizabethans and America* (London: Macmillan & Co Ltd, 1959)

A. L. Rowse: *Shakespeare's Southamton Patron of Virginia* (New York: Haper & Row, 1965)

Patricia Seed: *Ceremonies of Possession in Europe's Conquest of the New World, 1492-1640*

(Cambridge: University Press, 1995)

Bernard Sheehan: *Savagism & Civility Indians and Englishmen in Colonial Virginia* (Cambridge: Cambridge University Press, 1980)

J.M.Smith (ed.) : *Seventeenth-Century America* (Chapel Hill: The University of North Carolina Press, 1959)

John Stoye: *English Travellers Abroad 1604-1667* rev.ed. (New Haven and London: Yale University Press)

L. G. Tyler: *England in America* (New York: Greenwood Press, 1969)

Alden T. Vaughan: *American Genesis Captain John Smith and the Founding of Virgina* (Boston and Toronto: Little, Brown and Company, 1975)

T. J. Wertenbaker: *The Shaping of Colonial Virginia* (New York: Russell & Russell, 1958)

T. J. Wertenbaker: *Virginia under the Stuarts 1607-1688* (New Jersey: Princeton University Press, 1914)

T. J. Wertenbaker: *Give me Liberty The Struggle for Self-Government in Virginia* (Philadelphia: The American Philosophical Society, 1958)

T. J. Wertenbaker: *The Planters of Colonial Virginia* (New Jersey: Princeton University Press, 1958)

L. B. Wright: *Religion and Empire The Alliance between Piety and Commerce in English Expansion 1558-1625* (New York: Great Seal Books, 1959)

L. B. Wright: *The Atlantic Frontier Colonial American Civilization* (New York: Octagon Books, Inc., 1965)

Louis B. Wright (ed.) : *The Elizabethans' America* (Massachusetts: Harvard University Press, 1966)

Silvio Zavala: *New Viewpoints on the Spanish Colonization of America* (Philadelphia: University of Pennsylvania Press, 1943)